

---

 論 文
 

---

## 発達障害特性のある幼児の人間関係を促進するための支援に関する文献研究

○福谷理恵\*1 山口季音\*2

キーワード：発達障害、幼児、人間関係、保育、幼児教育、インクルーシブ保育

## 1 はじめに

保育現場では、発達障害特性のある子どもに接する機会が多く見られる。発達障害特性のある子どもとは、発達障害者支援法<sup>註1</sup>で示された障害のある子どもだけでなく、診断は受けていないが発達障害に見られる行動特性が強いため保育者が配慮を要する子どもたちを指す。

国立特殊教育総合研究所（2007）によると、全国の12の市を対象地域とした調査を行った結果「個別的な配慮・支援・工夫を必要としている幼児」は79.8%の幼稚園、83.0%の保育所に在籍が認められたと報告されている<sup>1)</sup>。また、発達障害の診断はもたないが、保育者から見て「気になる子ども」の存在は多くの現場にある。「気になる子ども」とは概念的に定義が確立された専門用語ではないが、本郷ら（2007）は「知的な発達には顕著な遅れは認められないにもかかわらず、「落ち着きがない」「他児とのトラブルが多い」「自分の感情をうまくコントロールできない」などの特徴をもつ子どものことである」と定義している<sup>2)</sup>。中島ら（2012）は「気になる子ども」について、「発達障害と診断されていないが、会話が成立しにくい、指示が通りにくい、落ち着きがない、かんしゃく・パニックを起こしやすい、一人遊びが多い、こだわりがあるなどの特性を持つ」とし、発達障害のある子どもが集団生活をおくる際にかかる困難さと特徴が重なる面が多いことを指摘している<sup>3)</sup>。藤井・小林（2010）は富山県内の幼稚園・保育所に勤務する保育者に対して調査を行い、「気になる子ども」と発達障害との関連性について、「PDD・ADHD・MRが疑われる子どもたちの

グループと、障害があるとは特定できないが一人遊びが多く集団参加ができない子どものグループが存在することが示された」と述べている。保育者が感じる「気になる子ども」の中には、発達障害の疑われる子どもが存在する可能性が強く示唆されている<sup>4)</sup>。

一方で、このような保育現場で保育士が抱える困難感やバーンアウトについて調査を行った研究も見られる。吉兼・林（2010）は、山口県内の保育士15名・幼稚園教諭17名に無記名のアンケート調査を行い、配慮を必要とする子どもの有無と子どもの様子、対応状況、日本語版MBI（バーンアウト尺度）による保育者の評定を行った。サンプル数は少ないが、この調査では、発達障害特性のある子どものうち診断がついていない子どもは約半数おり、集団保育の場での対応に困難感を感じる保育者の様子が、幼稚園・保育所ともに見られた。この研究で示されたバーンアウト状況については、「発達障害特性のある子どもを担当している保育士と幼稚園教諭に限定して比較すると保育士のほうが全て（脱人格化・情緒的消耗感・個人的達成感の低下）の領域でバーンアウト指数が高かった」、「特に最も重篤なバーンアウト状態と想定される脱人格化でその傾向が著明であったことは、発達障害特性のある子どもを担当する保育士は強い保育に対する負担感や保育困難感を感じていることを示唆している」と述べている<sup>5)</sup>。木曾（2013）は、大阪府下4市の公立保育所20か所と私立保育園64園の計84施設で、2～5歳児クラスの担任として働く保育士を対象として、保育所（園）における発達障害の傾向がある子どもの保育の困難性と保育士のメンタルヘルスとの関係を明らかに

\*1 至誠館大学 非常勤講師 \*2 至誠館大学 現代社会学部

することを目的としてバーンアウト尺度を用いた質問紙調査を行った。その結果、半数以上の保育士が「発達障害傾向児がクラスにいるが、診断を受けている子が複数いることは少なかった」という保育現場の状況とともに、「診断を受けている障害児数は保育士のバーンアウトに関係しないが、診断を受けていない発達障害傾向児の数の多さが保育士のバーンアウトに影響していると考えられる」ということを報告している。その原因として考えられるのは、診断を受けている子どもに対しては、加配の人員が付き、保護者や支援機関との連携体制がとられるが、診断のない子どもについては人員不足などによる保育の困難さのなかでクラス運営をしなくてはならない状況を要因としてあげている<sup>6)</sup>。保育者自身の心身の健康を考慮すると、発達障害の診断を受けて配慮を必要とすると認識された子どもだけではなく、発達障害の可能性のある子どもを潜在的に含む「気になる子ども」も含めた支援を保育の場で如何に実践していくかの技能を研鑽する機会が必要とされていることがわかる。

廣瀬ら（2018）は、経験19ヶ月未満の新任幼稚園教諭および保育士8名に対して半構成的面接を行い、M-GTA（修正版 グラウンテッド・セオリー・アプローチ）の手法を用いて分析を行った<sup>7)</sup>。発達障害の診断のある子どもや「気になる子ども」に関わり始めた新任の保育者は、「まずは拠り所として大学・短大で学んだことを振り返り、そこにどうして関わったらよいかのヒントを求める」のだが、ほとんどの新任の保育者が「大学・短大での学びだけでは役に立たない」ことを述べている一方で、一部には「大学・短大での学びが役に立った面もある」「大学でちゃんと学べば良かった」という声もあった。DSM（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders; アメリカ精神医学会編）<sup>註2)</sup>に依拠した発達障害全般に関する概論を座学で学ぶだけでは、実際の子どもの行動に直面した際にどうしてよいかわからないということなのであろう。しかし学んだ基本が決して役に立たないわけではなく支えに

もなっているということである。保育士養成校での限られた授業時間の中に、如何にして効率よく具体的な対応方法の例示を加えながら学生に伝えていくかの重要性がわかるインタビュー調査結果の報告である。廣瀬・内木（2020）は、高等教育機関においては「発達障害の理解を深める教育は重要な社会的意義を持っており、「発達障害者の特性などについての知識だけではなく、発達障害者の様々な体験の手記や事例を通して、発達障害者の立場になった疑似体験などを通して、実際に発達障害の人と交流する機会を通して、相手の立場になったロールプレイ等を通して、共感性を高めていく必要がある」ことを教育機関の課題としてあげている<sup>8)</sup>。

発達障害特性のある子どもを保育の場で支援する際に最も重要な課題となるのが、配慮を必要とする子どもと他児との人間関係を如何に育んでいくかである。そして特別な配慮を必要とする子どもだけでなく、幼児期の発達課題として他者と関わる力を育むことは、一人ひとりの子どもにとって、その後の人生の生きる力の礎となる重要な要素でもある。保育所保育指針（平成29年3月）の第1章総則（2）保育の目標においては「（ウ）人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、そして人権を大切にすることを育てるとともに、自主、自立及び協調の態度を養い、道徳性の芽生えを培うこと」とある。3歳児以上の保育における「イ 人との関わりに関する領域「人間関係」のねらいには「①保育所の生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。②身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。③社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける」とある<sup>9)</sup>。森上ほか（2001）は、「生きる力」の原点には“人とのかかわり”ということへの配慮が重要なものとして位置づいてくることになります。（中略）、子どもたちにとって、人とのかかわりを最初から踏み固めることが可能な幼稚園や保育所の役割がきわめて大きくなってきている

として、どの子どもにとっても「人間関係」を育む力の育成は「生きる力」の涵養であり、この時期の子どもにとって重要な課題であると述べている<sup>10)</sup>。

発達障害特性のある子どもの人間関係を促進するための支援を軸に子どもたちに関わっていくことは、インクルーシブ保育の実践に繋がるものと考えられる。そして、そのための知識や技能を保育士養成校の授業で習得する機会をもつことは、学生が将来、保育現場に出た際に感じる保育困難感やバーンアウトの低減・予防につながる可能性を高めることになるものと期待される。本研究は、発達障害特性のある子どもの人間関係支援に関する文献を整理して紹介し、保育士養成の教育現場での授業づくりに役立てることを目的としたものである。

## 2 方法

まず国立国会図書館サーチ（以下 NDL Search と記す）に、キーワード「発達障害、人間関係、保育」「発達障害、社会的コミュニケーション」「発達障害、関係性」を入力して検索した。2000年以降の論文を対象として、発達障害特性のある子どもの人間関係形成の支援に関する論文を抽出した<sup>註3</sup>。併せて、『特殊教育学研究』も対象とした。抽出した論文については、支援アプローチの立場と分析方法による分類を行った。

## 3 文献の分類

NDLSearch で検索した論文数は、全部で 162 件であった。検索のキーワードごとに見る内訳は、「発達障害、人間関係、保育」8 件、「発達障害、社会的コミュニケーション」22 件、「発達障害、関係性」132 件であった<sup>註4</sup>。このうち、幼児期から学齢期にかけて主として子ども同士の人間関係形成に関するものを対象として文献を抽出した。抽出した論文数は 8 件で、それらは次の 4 つの立場からの研究に大別できると考えられた。すなわち、①保育現場での観察記録に基づく研究、②保育現場での支援の実践研究、③応用行動分析学の立

場における子ども同士の人間関係形成のトレーニングと成立条件を検討した研究、④発達心理学をベースとしながら人間性心理学的アプローチによる解釈を試みた研究、である。

## 4 分類した文献の紹介

以下、上記の 4 分類に従って文献紹介を行う。

### ①保育現場での観察記録に基づく研究

i) 松井 (2004) 「統合保育における自閉症児の模倣に関する研究」<sup>11)</sup>

保育現場における自閉症児と他者とのコミュニケーションに関して、模倣が生じた場面を中心に扱った論文である。対象児は就学前の 6 歳の女児 1 名で自閉症の診断を受けていた。統合保育を行う幼稚園のクラスに執筆者が週 1 回通って午前中の参与観察を 1 年間行った記録である。観察場面では、「動作模倣」のすべてが「対子ども (集団) であったことを報告しており、模倣が生じた場面を中心に検討し、統合保育における模倣の意義、ならびに保育者の支援について考察している。模倣についてはエピソード記録を①具体物の操作模倣：対大人、②具体物の操作模倣：対子ども、③動作模倣：対子どもの 3 つに大別している。そして、それぞれのエピソード記録の場面を分析するとともに 3 タイプの模倣の生起回数と生起した時期を踏まえて、統合保育という年齢相応の自然な社会的文脈の中で自閉症幼児に対する支援のポイントを挙げている。特に、機会利用型指導法を用いてリファレンシャル・ルッキング (referential looking)<sup>註5</sup> を出現させるための共同注視 (joint attention) の三項関係 (保育者と対象児が同じ対象物を共同注視して意味を共有する前言語コミュニケーション) を作り出すことをポイントとしてあげている。同年代の子ども集団の中に入りながら、子ども同士の遊びの模倣行動も生じる中で保育者と対象児のリファレンシャル・ルッキングも引き

出すことは、対象児のコミュニケーション能力を言語面でも豊かにする土壌であり、この支援を導き出すことの重要性を示唆している。

ii) 松田ほか（2008）「統合保育の実践—広汎性発達障害を持つ子の保育と友達関係—」<sup>12)</sup>

広汎性発達障害のある就学前の子ども1名の年少組から年中組での様子について、一斉保育の中での記録である。「こだわりの特徴」と「保育現場での援助の実際」の具体例をエピソード記録の中から抽出している。エピソード記録は、「排せつ」「食事」「歯磨き」「体操」「音楽」「制作活動」「人間関係」「集団ゲーム」「言葉」「環境」といった保育所生活場面ごとにあげられており、さらに行事に向けての導入と配慮についても具体例がエピソードとして紹介されている。「日々の生活の中で、Rちゃんが興味をもつ物や好きな遊びは何か、成長過程なども認識しながら、パニックを起こす原因となることや問題となる行動などの情報を得た。そんな中で、Rちゃんが安心できる環境ができるよう心掛けながら、信頼関係を築く」ことを目標としながら関わっていくプロセスの中で、友達との関わりも増えていった様子である。援助目標については、家庭との連携のうえで対象児にできることを目標設定し、園の集団生活と家庭とで無理のないようにできるように配慮していくことの大切さを述べている。

## ②保育現場での支援の実践研究

i) 小松・小林（2014）「高機能広汎性発達障害のある男児に対する支援的な保育ルールのあるゲーム遊びを通したクラス集団への介入を通して」<sup>13)</sup>

園と保護者の同意を得たうえで保育現場に介入した実践研究である。対象児は観察開始当時5歳の広汎性発達障害のある1児で、約9ヶ月間にわたり支援を行った。小松・小林は、対象児に発達障害チェックリストと生態学的調査<sup>註6)</sup>によるアセスメントを行ったうえで個別支援計画を立てて事例研

究を行っている。記録は、まず一次データとして集団保育場面でビデオ録画によって行ない、さらに録画を再生しながら対象児の言動と保育者・他児の言動とのインタラクションの逐語録を起こしている。対象児が参加可能な集団でのゲーム遊びを10種類とりあげ、仲間関係が作れるように支援している。「しっぽとり」「バナナ鬼」「くつつき鬼」のような鬼ごっこでは、視覚的構造化を行うことで全ての子どもにルールが容易に理解できるように配慮している。このようにクラス全体で楽しく遊ぶ経験を保障しながら、対象児の仲間関係の構築支援を行った結果、介入初期には感情の抑制が効かずプレーから離れることもあった対象児が、次第に仲間からの応援によって気持ちの切り替えができるようになり、協力しながら得た得点を見て仲間と一緒に喜びあえるようになったという変化を報告している。

## ③応用行動分析学の立場における子ども同士の人間関係形成のトレーニングと成立条件を検討した研究

i) 安川（2002）「情緒障害学級におけるSSTプログラムの検討—ボールゲーム場面での「あたたかいメッセージ」の指導を通して—」<sup>14)</sup>

小学校情緒障害通級指導学級において男児6名に対して、対人関係スキルの獲得のためのSST（ソーシャル・スキル・トレーニング）を行った。ボールゲーム場面での「あたたかいメッセージ」の指導を通してその効果を検討した研究である。「あたたかいメッセージ」を言葉メッセージ、ボディーメッセージ、タッチメッセージ、そして他者からのメッセージに対する適切な応答の4つのカテゴリーに定義し、これらの表出頻度を増加させることをねらいとした。指導計画は、他者や教師の介入の多い設定からフェイドアウトする手順により、ボールゲーム場面の中での社会的スキルの定着化を図った。「あたたかいメッセージ」を表出してコミュニケーションできたかどうかについては、5名の独立した観察者により評価している。

ii) 網谷・武蔵 (2008) 「発達障害児の集団における社会的コミュニケーション環境についての検討—「発表者」「聞き手」の役割学習の効果—」<sup>15)</sup>

「児童が、物理的環境や社会的環境を手がかりに、仲間に注目し応答を期待することを体験的に学習する」ことを目的として行われた研究である。特別支援学校小学部1・2年の児童5名に対して、仲間との社会的コミュニケーションを図る学習を日課に位置付けて設定し、相互交渉での役割がどのように学習されるかについて1年間の訓練を行った。「集団場面における仲間同士の相互干渉での役割の維持に関する条件として、発表者の役割には、相手の視野に入る位置取り、聞き手の役割には「聞き手」一人一人の行動に「話し手」の明確な反応が随伴する手続きの工夫などが必要であることが示唆された」と報告している。発達障害児が仲間との社会的コミュニケーションを図るための学習環境を検討し、どのような文脈で、どのような刺激提示を行えば、コミュニケーションに必要な「話し手—聞き手」役割が学習しやすくなるかの手続きの工夫を行ってオペラント行動<sup>註7)</sup>の形成を試み、発達障害児がより自然に話し役—聞き役ができるようになるための支援を行った事例研究である。具体的には、話し手の立ち位置には足型マークを貼り、聞き手役は聞いた内容に対して応答するため拍手をしたり絵札(花丸カード)をあげて話し手に聞いていることが視覚的に伝わる工夫などを行い、楽しく参加できるような支援を行っている。

iii) 藤原・園山 (2018) 「認定こども園における自閉スペクトラム症児に対する社会的遊びの支援—遊びの選定方法と支援効果の検討—」<sup>16)</sup>

認定こども園に在籍し、週に1回大学の教育相談に来談している3歳の男児1名に対して3ヶ月間の介入が行われた研究である。生態学的調査に基づく社会的遊びの設定をし、視覚的刺激、モデ

ル提示、プロンプト<sup>註8)</sup>を用いた支援を行うことにより、自閉症スペクトラム障害の子どもが参加しにくいと言われるごっこ遊びへの参加が可能となり参加時間も増加していったことを報告している。生態学的調査としては、園での遊び場面の観察、担任と介助員を対象に社会的遊びのアンケート、そして担任への聞き取りを行った。設定した遊びは室内のごっこ遊びは「薬屋さん」、屋外のルール遊びは「絵合わせ」「おもい運び」であった。社会的遊び段階の定義については「一人」「平行」「連合」「協同」の4レベルの分類を行い、この4段階のレベルに基づく記録用紙を作成して1分ごとのインターバル・レコーディング<sup>註9)</sup>で記録をとっている。この研究の課題については「本研究で選定した遊びは、対象児や他児の参加は可能であったが、屋外の自由遊び場面におけるルール遊びは般化<sup>註10)</sup>に至らなかった。この結果は、対象児や同じクラスの他児は、ルール遊びを行うためには保育者の進行が必要な段階であったため、支援後、保育者の進行がない状況で子どもたちだけでルール遊びを開始することが難しかったことが、般化、維持されなかった一因と考えられる。遊びの種類ごとに般化を促す物的・人的環境の調査や整備が必要であり、今後も生態学的調査の調査項目の修正と妥当性の検討が必要である」と考察している。

#### ④発達心理学をベースとしながら人間性心理学的アプローチによる解釈を試みた研究

i) 浦崎 (2009) 「自閉症児との関係性の成立と発達的変容—統合保育に焦点を当てて—」<sup>17)</sup>

執筆者が病院で療育をしている園児が通う保育現場にスーパーバイザーとして関わり、1事例について発達の變容を報告している。対象児は自閉症の診断を受けた4歳3ヶ月の男児である。「自閉症児の多動、孤立傾向のある遊びを尊重しつつ、特定他者との共有遊びへと広げていくこと、保育園で楽しみを与え自閉症児の世界を広げてくれる

存在になることが保育者の最初の課題となる。そのような信頼できる人が一人でも園にいると自閉症児の精神的な安定が増す」と述べ、そのような人物の存在は「重要な他者」であり、重要な他者との関係性を基盤に交流が広がり自閉症児と健常児の共有体験を持つための関わりへの土壌となっていくと述べている。この論文は、今日の発達障害児研究としては珍しく、受容的なプレイセラピーで関わり人間性心理学的な観点からの解釈を行った研究である。

ii) 浦崎 (2000<sup>b</sup>) 「自閉症児における「能動—受動」のやりとりの発達の変容—遊びを通じた関係性の成立に焦点を当てて—」<sup>18)</sup>

自閉症男児1名を対象に、6歳1ヶ月から関わりを開始し7歳1ヶ月までの約1年間、28回のセッションを行った事例研究である。対象児の遊びを見守り、また一緒に遊ぶことで生じる本児の情動に触れて、信頼関係を築くこと、さらにそのつながりを基盤に「能動—受動」のやりとりを形成していくことを目的とした関わり方をしている。トランポリンや描画などを媒介としたやり取り遊びの中で、自閉症児が「信頼できる他者」との関係性を基盤に、共有できる世界を広げていくことの重要性が示唆された。「本児を安定させるための関わり方はできるだけ不快を与えずに、本児と同様に感覚的、物理的な世界へ入り、本児の気に入っている刺激を送り続けることであった」と、子ども自身の見方感じ方を保育者自身も体感し理解しようとする姿勢の重要性を説いている。エピソード記録に基づきながら現象学的な解釈を用いたアプローチにより本児への共感的な対応を試みた研究は、発達障害特性のある子どもの支援分野では珍しい。「関係性」の発達心理学をベースとしながら、人間性心理学的なアプローチを行った研究であると解釈できる。

本報は、保育士養成の教育現場での授業づくりに役立てることを目的としつつ、発達障害特性のある幼児の人間関係を促進するための支援に関する文献研究を分類、紹介したものである。まず、紹介した文献について、どのように保育士養成のための授業の中で役立てられるかについて検討を試みよう。

### ① 保育現場での観察記録に基づく研究

保育現場での研究は、外部から調査に入った研究者には難しい。参与観察にとどまり、そこでのエピソード記録を報告した研究がよく見られる。数々の制約の中で許可された記録に基づき、対象児への有意義な働きかけのエピソード場面と状況のトピックを取り出して提示するスタイルの研究は、保育士養成の授業においても保育場面での具体的な対応の仕方の事例として学生に例示しやすい。また、保育現場での観察記録の文献をもとに子ども同士の心のバリアフリーを考えながら人間関係形成を考察する試みもインクルーシブ保育を行ううえで大切である。

### ② 保育現場での支援の実践研究

数少ない貴重な事例である。保育現場、保護者、そして子どもたちからの協力を得ることができて、個別支援計画を立てての目標設定に基づく介入が可能となった研究である。小松・小林 (2014) は、園での集団遊びの場面において、発達障害特性のある子どもだけでなく参加するすべての子どもに分かりやすく見通しの持てるルール説明をすることで、遊び場面での対人トラブルを減少させ、インクルーシブな関わりを実践した。継次処理（音声情報を処理）するためのワーキングメモリが少ないと推測される対象児に対しては、子どもが興味を持てるような視覚情報を使用して同時処理しやすく構造化することで、発達障害特性のある子どもには難しい鬼ごっこ遊びにも楽しく参加できる支援を行っている。具体例として、鬼役の子どもはカラー帽子を被りゼッケンをつけ、追いかける側の子どもはマジックシールで着脱が容易な尻尾を装着することで「追うための

## 5 考察

目標物」が視覚的に明確となり、「追う一追われる」の役割交代を容易にする工夫をしている。このような具体例は、保育士養成の授業でも、ごっこ遊びを子どもにわかりやすく構造化する方法として提示できよう。小松・小林（2014）は、保育現場での「気になる子」の定義について、先行研究を精査して、「知的に遅れはないが落ち着きがなく人間関係のトラブルが多い」と定義し、そのような子どもは医師の診断を受けてはいないが発達障害が疑われる一方で支援からこぼれ落ちやすいことを特徴としてあげている。集団遊び場面において「どの子どもにもわかりやすい支援」を行うことは、インクルーシブ保育の実践にも繋がるという主張も重要である。インクルーシブ保育を現場で行うためには、診断がなくとも「気になる子」も含めてアセスメントするためのエピソード記録を抽出して目標設定を行い、ルールのある集団遊び場面を通じて支援を行う。支援方法としては、発達心理学と応用行動分析学の双方の技法を用いた環境作りと評価方法で、子ども同士の人間関係作りを促進した研究である。

### ③ 応用行動分析学の立場における子ども同士の人間関係形成のトレーニングと成立条件を検討した研究

発達障害特性のある子どものスキル形成や支援においては、今日では応用行動分析学で用いられる機能分析と環境設定によるアプローチが主流である。しかし、例えば「言語行動」や「買い物行動」等といったスキル形成の取り組みは多く行われてきたが、「同年代の友達同士のやりとり」や「集団遊び」を保育所や幼稚園などで行うための支援は、まだ多くは行われていない。発達障害特性のある子どもと関わる際に一番難しいスキル・場面であるため、研究者はその独立変数・従属変数を如何に設定すればよいのかについて頭を悩ませ続けてきた。

発達障害特性のある子ども、特に自閉症スペクトラム障害のある子どもの場合は、「心の理論 (Theory

of mind)」研究<sup>註11</sup>でも示唆されているように他者の感情や意図の理解が難しく、ノンバーバルなコミュニケーションの比重の高いやり取りを苦手とする子どもが多く見られる。そのため、「あたたかいメッセージ」というような表情や仕草・語調・語用論などから成る複合的かつ情緒的な文脈を感じながらやり取りを行うスキルについては、多くの研究者の挑戦を困難としてきた。安川（2002）は、言語のある高機能の子どもたちを対象にこのテーマに取り組んだ。子どもにとってなじみやすいアニメのキャラクター（ぼく、ジャイアン、のび太）を用い、子ども同士がやり取りする際に相手の態度がどのタイプにカテゴライズされるかをビデオ→ロールプレイ→ボールでのやり取り遊びの3段階で訓練することで、子ども同士のポジティブで相手に受け入れやすいソーシャルスキル形成を行った。その結果、訓練前に比べて攻撃的な行動が減少したと報告している。このような方法も、保育現場に実習に行く学生たちが知識として持っておくことは、有意義であると考えられる。実際の子どもの前にした時のモデル提示の参考となり、全ての子どもにとって楽しくわかりやすい支援方法の一つとなろう。

網谷・武蔵（2008）と藤原・園山（2018）の研究は、集団生活をおくる場面での生態学的調査を用いながら、課題の選出と環境の構造化を教育・保育現場の職員にもわかりやすく説明できるような可視化を行ったものである。「行動」とは、「観察可能な（2名以上の独立した評価者が独立変数・従属変数の生起をカウントして高い一致率が得られる）」観点からコミュニケーションの機能分析を行い、そのデータに基づいて、同じ手続きで行えば別の人間が行っても再現可能性のある技法である。心的出来事（内面）の解釈については、観察者側の自己投影や勘違いの可能性もしばしば起こることを考慮して立ち入らない（これを行動の立場の人間は「配慮」や「思いやりである」と言う）立場である。ただし、

客観的に測定できるデータサンプリングと記述に徹することは、多くの情報がこぼれ落ちてしまう側面もある。研究者は、データのサンプリング方法や表示方法に苦心するのであるが、藤原・園山(2018)は1分ごとのインターバル・レコーディングを行うことでその問題を乗り越えようと試みている。一方、網谷・武蔵(2008)の研究については話し手が話している間の聞き手側の注視について回数でカウントしているが、実際のコミュニケーションでは「聞き手は話者に対して注視を継続する」ほうがコミュニケーションとしては質が高いといえよう。その場合、注視の回数は1回となってしまう。逆に回数が多いということは、それだけ視線がたびたび逸れるということではなかろうか。注視の持続時間(反応時間)についてもデータ提示があれば、より効果が見えるものと考えられた。応用行動分析学によく使われる独立変数と従属変数の変化を示した折れ線グラフで「コミュニケーションにおける相手の注視」を標示することは難しい課題である。今後も様々なサンプリング方法を開発しつつ標示方法も工夫していくことが課題である。そして、こういった技法や課題は、保育士養成の授業だけでなく、例えば卒業研究の指導などでも役に立つであろう。

#### ④ 発達心理学をベースとしながら人間性心理学的アプローチによる解釈を試みた研究

「以心伝心」という言葉もあるとおり日本人は、かつてはこのような心理学的アプローチを非常に好む傾向があった。そして、自閉症を中心とする発達障害特性のある子どもの支援においては、当初は「冷淡な親の養育が原因」と考えられてきた歴史から、精神分析学による子どものプレイセラピーを行う受容的な対応が主流の時代があった。しかし、そのアプローチでは、発達障害児の予後は芳しくないという結果が判明していくにつれて、1970年代から1980年代を前後として世界的にすたれていった。自閉症とその周辺の発達障害については、「冷淡な親に

より心理的に心を閉ざしてしまった子ども」ではなく脳機能に器質的疾患を持っているのではないかという説が有力となり、アプローチ方法のパラダイム転換となった。その結果、「対象児の内面を推測して行動の意味付けや解釈を行う」対応や「セラピストの逆転移(推察や感情移入による投影)」などは行わず、内面(例をあげると浦崎論文の「信頼できる」という表現などは、これは執筆者側の推測の域の解釈である)には立ち入らない客観性のあるデータに裏打ちされたアプローチが主流となった<sup>註12</sup>。そして、このような「行動」の立場から刺激を制御していく支援技法によって問題行動が改善していった事例が数多く報告されていった。

一方で、保育現場に実際に臨むと、「他者の心が読めない」と言われてきた自閉症を中心とした発達障害特性のある子どもたちが、社会的な文脈をきちんと感じておりながらも逸脱した行動をとっている場面に出会うことはしばしばある。彼らは「他者の心が読めない、見えない」のではなく、眼の淵で見たり感じたりしてはいるが、それ以上に自己の関心事(内面・外部環境とも)のほうに注意が傾いて集中しやすいことを親や多くの保育者が感じるところである。例えるならば、ゲシュタルト心理学で言うところの図と地の反転のように他者や社会の側の情報への注意が向かなくなり自分の関心に没頭する傾向が強いのではないかと感じられる。もし、子どもが社会的状況を感じながらも他者への注意が向きにくいと仮定するならば、応用行動分析学による環境設定や構造化と併用しながらも、浦崎(2000<sup>a</sup>)(2000<sup>b</sup>)の提言するようなアプローチも必要であろう。この二論文は、どちらかという保育者の関わる姿勢に重点を置いた研究であるが、子どもの人間関係を育む基盤としての保育者の在り方を問うた視点から取り上げることとした。「自閉症児は発達に伴って自分なりの適応能力を身に付けようとする。私たちと周囲の物事の感じ方が異なる



分、世界を耐えがたいものだと感じている分自閉症特有の行動が生じていると考えると彼らの行動の意味が見えてくる」と、彼らの感じ方の立場に身を置きながら共感的な接し方を心掛ける保育者の存在の重要性を力説する。浦崎の主張する支援者側の「共感」的な態度というものは、1940年代の終わりから60年代に主流であった「心情論」や精神分析的な「受容的な態度や解釈」とは異なり、現代の脳科学に基づく発達障害研究の知見に根差した「共感性」である。その点を踏まえながら、例えば、描画を通じて箱庭療法のような関わり方をしたり、描画からどういう発達段階への移行期を現しているのかチェックを行いつつ、子どもの目線や感じ方を自分自身もわかろうとする「共感性」が重要なのだと主張しているのである。

この研究とは対照的な立場にある行動主義のアプローチによる関わり方で、しばしば批判にあがるのは、あまりにも操作的な態度や機械的な解釈をとる支援者が見られることがある点である。これには、定型発達の子どものもとより発達障害特性のある子どもも不愉快そうな反抗的な態度を示すことはしばしば見られる。行動変容では有効性が高いと言われる「行動」の技法で環境を整えながら、一方で浦崎(2000<sup>a</sup>)(2000<sup>b</sup>)のような姿勢も忘れてはならない。保育者として「あたかもその子ども自身の目となり感じ方となろう」と共感する努力の姿勢をもつことは、幼児期の発達障害特性のある子どもの人間関係を涵養していくために大切なことではなかろうか。廣瀬ら(2018)は、「[発達障害の子と「気になる子」の成長を促す保育者の姿勢]は、発達障害傾向の子と信頼関係を築くことが、その子の成長を促す環境となることについての気づきを示す」<sup>7)</sup>と述べているが、そのこともまた見逃してはならない事実である。車輪の両軸のように行動科学の技法と手を携えることで子どもの成長を促すと言えよう。

## 6 総合的考察

4つのタイプに分類した8件の論文を紹介した。保育士養成校の授業にどのように用いることができるのかについて総合的考察を行う。

①保育現場での観察記録に基づく研究の場合は、保育現場での一日の生活の流れのなかでの様子が生に近い具体的なやり取りとしてわかるという特徴がある。学生に、より具体的に現場での様子をイメージしながら発達障害特性のある子どもの様子や関わり方を説明する事例として紹介しやすい。②保育現場での支援の実践研究と③応用行動分析学の立場における子ども同士の人間関係形成のトレーニングと成立条件を検討した研究は、そこでのアセスメント方法、介入のための支援技法、データサンプリングと評価方法が、個別支援計画を作成する際の具体的な方法として例示できるだけでなく、学生の卒業研究における参考としても示すことができよう。④の発達心理学をベースとしながら人間性心理学的アプローチによる解釈を試みた研究では、現在主流となっている行動科学の立場からのアプローチだけでは網の目からこぼれ落ちてしまう支援者側の関わる姿勢について、今一度、問い直す機会を与えられるものである。対象児だけでなくすべての子どもたちとの人間関係形成に与える保育者の姿勢の影響を再考させられる問題提起をしていると言えよう。

## 7 まとめと課題

本論文は、保育士養成において発達障害特性のある幼児の人間関係形成を支援していくために役立つと思われる先行研究を紹介したレビューである。今後、学生の指導の中でどのように活用しながら授業づくりを行っていくかを実際に展開しながら、具体的な授業づくりをしていくことが課題である。限られた時間の中で、どのようにすれば学生に効率よく伝えることができ、アクティブ・ラーニングの展開も可能であるかについて、しっかりと構成を考えていく必要がある。学

生の疑問にこたえながら、一人ひとりの子どもへの対応方法として、知識や技能の引き出しを多く持つ人材育成をするためにはどうしたらよいかを追究していきたい。

[註]

註1 発達障害者支援法（平成17年4月施行）では次のように定義している。

第二条 この法律において「発達障害」とは、自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるものをいう。

発達障害特性のある子どもは、一人ひとり様々な状態像を呈するが、保育においては同年代の子どもと一緒に集団行動や人間関係を構築していくなどの社会性の問題が幼児期における支援の重要な課題となる。

註2 DSMとは、アメリカ精神医学会編纂によるDiagnostic and Statistical Manual of Mental Disordersの略である。WHOのICD（International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems、疾病及び関連保健問題の国際統計分類）と編著者は重なる部分が多く、双方とも国際的な診断分類として広く使われている。ただし、ICDは世界のあらゆる地域や社会状況で利用可能とするために診断基準が緩く作られているのに対して、DSMは先進国社会を想定して作られた詳細な記述となっている。日本では通常、DSMを使用している。現在は、第5版であるDSM-5が使用されている。

註3 学齢期の研究も取り上げたのは、幼児期の子どもとの人間関係形成の支援を保育士養成で考える際には、学齢期の状態像や支援も視野に入れながら考えることも大切であること、支援技法を工夫すれば幼児期の子

どもにも用いることができると考えられるからである。  
註4 2022年9月現在の検索によるものである。

註5 リファレンシャル・ルッキング(referential looking)とは、発達心理学において母子関係の分析から発話言語獲得において重要な役割を果たす行動として観察され報告されてきた。母親または保育者と子どもが同じ対象を共同注視(joint visual attention)して指差し行動が出現、指差し行動の意味を理解して子どもが母親または保育者の顔をチラッと見ることで相手(母親または保育者)もその対象物を見ていることを確認するという一連の行動である。相手の注意をその対象物にひきつけ、そのことで対象物の情報をコミュニケーション相手と共有する前言語行動で、これは言語によるコミュニケーションの基盤となる。

註6 生態学的調査(ecological inventory)とは、応用行動分析学における支援の際に、ターゲット行動が、支援を受ける対象児者の生活の場でどのように使用され維持されるのかを査定し、さらにはその支援を訓練室ではなく可能な限り生活している環境で行うために生まれたアセスメント法である。個々人のニーズを的確に把握し、さらには彼らの地域生活をも含めた情報を重要視した課題分析方法である。

註7 オペラント行動とは、「環境内の先行刺激を手掛かりとして自発され、その直後の結果(後続刺激)によって変容する行動のことである。そのような先行刺激が行動に対して効果を及ぼす場合、その刺激は、「弁別刺激として機能している」と言う。また、特定の後続刺激が与えられることで、その行動の出現が増える場合、その後続刺激は「強化刺激として機能している」と言う。弁別刺激と強化刺激を機能的にすることによって、新しい、安定した“弁別刺激→行動→強化刺激”の関係が出来上がることを、「オペラント条件づけ(operant conditioning)と言う」<sup>19)</sup>。

註8 プロンプトは、「行動を形成したりその生起率を上昇させるために与える付加的な手掛かり刺激のことである。行動の自発性を生み出すには、与えられる回

数や強さなどを徐々に少なくしていく必要がある<sup>19)</sup>。

註 9 インターバル・レコーディングとは、一定の観察時間内でターゲット行動が生じたインターバルの数を数える測定方法である。ある行動が生じるたびに数えるのではなく、一定の時間内にその行動が生じたかどうかを記録者がマス目の中に+かーで記入していく記録方法である。集計に際しては、プラスのマス目のみを集計する。保育所などで行動観察記録を取る際には、一定の時間間隔ごと（通常 30 秒以下）に電子音が鳴るイヤホンなどを記録者は装着して記録を取るなどしている。

註 10 一般化 (generalization) とは、「指導や訓練によって形成された行動が、指導や訓練が行われた環境以外でも成立することを言う」<sup>19)</sup>。

註 11 「心の理論 (Theory of mind)」研究とは、「他者の心を類推したり理解したりする能力」についての研究である。霊長類における実験・観察研究から発達心理学、実験心理学、脳科学や人工知能に至るまで幅広く行われてきた。自閉症児については、イギリスの Baron-Cohen(1985) が誤信念課題の実験を行ったところ通過率が 20% と低率であったことを報告したことをきっかけとして「他者の心が読めない」子どもではないかという仮説が広まった。

註 12 世界的に有名な TEACCH (Treatment and Education of Autistic and related Communication-handicapped Children) プログラムの場合は、行動科学の基礎研究に基づく技法も取り入れながら、医学、心理学、教育学、福祉などあらゆる有効な支援技法を総合的に取り入れて構成した実践研究と応用プログラムである。行動療法、応用行動分析学は基礎研究に基づく臨床研究に位置する。

[引用文献]

- 1) 後上鐵夫ほか (2007) 『調査研究報告書 乳幼児期からの一貫した軽度発達障害者支援体制の構築に関する研究—乳幼児期における発見・支援システムの実態調査を中心に—』独立行政法人 国立特殊教育総合研究所, 28-71
- 2) 本郷一夫ほか (2007) 「保育の場における「気になる」子どもの理解と対応に関するコンサルテーションの効果」『LD 研究』16 (3), 254-264
- 3) 中島正夫ほか (2012) 「保育所に通う発達障害を持つ子ども・「気になる子」の状況について」『椋山女学園大学教育学部紀要』5, 69-80
- 4) 藤井千愛・小林 真 (2010) 「保育者による「気になる子ども」の評価: 「気になる子ども」と発達障害との関連性」『とやま発達福祉学年報』1, 41-48
- 5) 吉兼信子・林 隆 (2010) 「特別支援教育時代における保育士の業務上の保育困難感について」『山口県立大学学術情報』3, 81-87
- 6) 木曾陽子 (2013) 「発達障害の傾向がある子どもと保育士のバーンアウトの関係—質問紙調査より—」『保育学研究』51 (2), 51-62
- 7) 廣瀬春次ら (2018) 「発達障害児や「気になる子」に関わる新任の幼稚園教諭および保育士の体験」『至誠館大学研究紀要』5, 37-50
- 8) 廣瀬春次・内木美有紀 (2020) 「発達障害に対する大学生のイメージと関連要因」『至誠館大学研究紀要』7, 1-9
- 9) 厚生労働省編 (平成 30 年 3 月) 『保育所保育指針解説』フレーベル館, 13-29, 204-227
- 10) 森上史朗ほか (2001) 『保育内容「人間関係」』ミネルヴァ書房, 6-7
- 11) 松井剛太 (2004) 「統合保育における自閉症児の模倣に関する研究」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』50, 249-254
- 12) 松田万知子ほか (2008) 「統合保育の実践—広汎性発達障害を持つ子の保育と友達関係—」『立正社会福祉研究』9 (2), 61-67
- 13) 小松・小林 (2014) 「高機能広汎性発達障害のある男児に対する支援的な保育ルールのあるゲーム遊びを通じたクラス集団への介入を通して」『富山大学人間発

達化学研究実践総合センター紀要 教育実践研究』9, 51-60

14) 安川直史 (2002) 「情緒障害学級における SST プログラムの検討—ボールゲーム場面での「あたたかいメッセージ」の指導を通して—」『特殊教育学研究』40 (1), 61-69

15) 網谷優子・武蔵博文 (2008) 「発達障害児の集団における社会的コミュニケーション環境についての検討—「発表者」「聞き手」の役割学習の効果—」『特殊教育学研究』45 (5), 265-273

16) 藤原あや・園山繁樹 (2018) 「認定こども園における自閉スペクトラム症児に対する社会的遊びの支援—遊びの選定方法と支援効果の検討—」『自閉症スペクトラム研究』15 (2), 25-35

17) 浦崎武 (2000<sup>a</sup>) 「自閉症児との関係性の成立と発達の変容—統合保育に焦点を当てて—」『一宮女子短期大学研究報告』39, 281-292

18) 浦崎武 (2000<sup>b</sup>) 「自閉症児における「能動—受動」のやりとりの発達の変容—遊びを通じた関係性の成立に焦点を当てて—」『特殊教育学研究』37 (5), 17-26

19) 小林重雄監修 (1997) 『応用行動分析学入門』学苑社, 257-263

[参考文献]

1) ローナ・ウィング著, 久保紘章ほか監訳 (1998) 『自閉症スペクトル—親と専門家のためのガイドブック—』東京書籍

2) 諸岡美佳ほか (1998) 「健常幼児及び知的障害児における言語の行動調整機能」『特殊教育学研究』36 (3), 11-21

3) 長崎 勤・小野里美帆共著 (1996) 「コミュニケーション発達の考え方」(『コミュニケーションの発達と指導プログラム—発達に遅れをもつ乳幼児のために—』日本文化科学社, 2-40

4) 加藤哲史 (1997) 「コミュニケーション行動を形成するための基礎的・応用的指導技法」(小林重雄監修『応

用行動分析学入門—障害児者のコミュニケーション行動の実現を目指す—』学苑社, 97-120

5) 子安増生・木下孝司 (1997) 「<心の理論>研究の展望」『心理学研究』68 (1), 51-67

6) 浦崎武 (2006) 「高機能広汎性発達障害をもつある小学生男子への重要な他者との関係形成による適応支援」『琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要』8, 1-18

7) 浦崎武 (2012) 「自閉症スペクトラム障害児における他者への同一化と自己存在に関する不安の軽減—フラッシュバックからの自己形成過程と他者との関係性の形成による支援—」『琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要』3, 63-85

8) 浦崎武ほか (2012) 「発達障がい児への他者との関係性を基盤とした集団支援—TSG における自閉症スペクトラム児に対する直感的心理化への支援—」『琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要』4, 70-95

9) 浦崎武・武田喜乃恵 (2016) 「自閉症スペクトラム障害児の自己同一性の形成の解明と学齢期の関係発達の支援の開発; 幼児期からの関係性発達の支援および、教育実践への展開に向けて」『琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要』8, 35-56

## **A Review on Supporting Relationship Formation in Infants with Developmental Disabilities**

Rie FUKUTANI      Kioto YAMAGUCHI

abstract : This paper is a review of previous research useful for supporting relationships between children with developmental disabilities and their peers in childcare training programs. 8 papers on supporting relationship formation among children with developmental disabilities were selected from articles published since 2000. These articles were categorized by supporting approach and analysis method into four types: (1) observation and recording research in childcare settings, (2) practical research on support in childcare settings, (3) research examining the training and conditions for the formation of relationships between children from the perspective of applied behavior analysis, and (4) research based on developmental psychology while interpreting it by humanistic psychology, was divided into four categories. We discussed how to use these four types of papers in classes for training childcare professionals. The issue for the future is how to apply them to teaching students while developing the classes.